

琉球大学学術リポジトリ

第二次世界大戦後における沖縄県からのブラジル移民青年隊の移住過程

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2021-06-22 キーワード (Ja): 戦後移民, 公募移住, 沖縄産業開発青年隊, ブラジル移民青年隊, 八重瀬町 キーワード (En): Postwar immigrants, public recruitment migration, Okinawan IndustrialDevelopment Youth Association, Seinentai of Brasil, Yaese Town 作成者: 花木, 宏直, Hanaki, Hironao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002011602

第二次世界大戦後における沖縄県からの ブラジル移民青年隊の移住過程

花木 宏直

- I. 問題意識
- II. ブラジル移民青年隊の概要
- III. ブラジル移民青年隊の移住過程
- IV. ブラジル移民青年隊の実態——八重瀬町出身者に注目して——
- V. 結論

キーワード：戦後移民，公募移住，沖縄産業開発青年隊，ブラジル移民青年隊，八重瀬町

I. 問題意識

本稿は1950～1960年代に沖縄県から送出されたブラジル移民青年隊に注目し、沖縄県の戦後移民の特性の一端を検討することを目的とする。

沖縄県は1888～1941年の出移民数が広島県（96,848人）に次ぐ府県別2位の72,227人であり¹⁾、近代日本有数の海外移民送出地域となった。第二次世界大戦後は1948～1993年の出移民数が17,726人で、第二次世界大戦前の4分の1に減少した²⁾。一方、1952～1993年に国際協力事業団（現・国際協力機構）や前身組織が扱った出移民数のみに注目しても、全国で計73,035人に対し沖縄県出身者は府県別1位の7,227人おり³⁾、第二次世界大戦後も沖縄県は日本有数の海外移民送出地域を維持していた。

沖縄県からの戦後移民の特性として、1950年代後半から1960年代前半が最盛期にあたり、移住先はブラジルが大半を占めていた⁴⁾。移住形態は家族が呼び寄せる近親呼寄が4割を占めていたが、家族以外の引受人が農業雇用を目的として呼び寄せる一般指名呼寄（3割）や、ボリビア計画移民や本稿で注目する「ブラジル移民青年隊」という移民事業をはじめ琉球政府や海外協会などによる農業開拓を目的とした公募移住（3割）も実施され、先発移民との血縁関係がなく呼寄移民が難しい者の海外移住を可能とした⁵⁾。沖縄県に限らず全国の戦後移民の動向をみても、1950～1960年代が最盛期であることやブラジル移民の多さ、国策による公募移住の比重の大きさが確認できる⁶⁾。

沖縄県からの戦後移民に関する既往研究をかえりみると、ボリビア計画移民を扱った論考が蓄積されている。そして、ボリビア計画移民は引揚による人口急増に対応するため、琉球政府と米国民政府の協力により⁷⁾、米軍統治下における沖縄県の軍事基地化や土地接收と並行して推進されたことや⁸⁾、満洲引揚者が地域の復興や農業振興の延長でボリビア

移民の送出に中心的な役割を果たしたことが指摘されている⁹⁾。一方、移住後はうるま病の発生など入植先の生活環境の厳しさゆえ定着率が低く、多くはブラジルのサンパウロへ移住し小資本で経営できる縫製業やフェイラ（露天商）などに従事した¹⁰⁾。ブラジル移民青年隊に関する論考もわずかにあり、受入態勢の不備のため農業での早期の自立が難しかったことや¹¹⁾、その後は地代の上昇に伴う農業での自立の難しさにより都市へ移住し商業などに従事する者が多かったことが指摘される¹²⁾。

また、日本本土の戦後移民についても、移民事業をめぐる農林省の役割の大きさや農家の二三男問題への対応として位置づけられていたこと、第二次世界大戦前の満洲開拓移民との連続性が指摘され¹³⁾、沖縄県のブラジル移民青年隊と関わりをもつ南米産業開発青年隊についても同様な特性がみられた¹⁴⁾。一方、戦後移民の募集対象には満洲をはじめ外地からの引揚者が多く含まれていたが、彼らは過去の経験から移民に抵抗感をもっていたことも指摘されている¹⁵⁾。

このように、沖縄県と日本本土からの戦後移民に関する既往研究では、ともに公募移住に注目し、移民事業の成立をめぐる政治的背景や制度的課題を明らかにしてきた。しかし、公募移住に応じた移民自身の動向についての検討が少なく、彼らを通じてみた公募移住の意義について十分明らかになっていない。

そこで本稿では、沖縄県からの戦後移民の中の公募移住の1つであるブラジル移民青年隊を対象とする。そして、ブラジル移民青年隊員の移住過程の検討を通じて、この移民事業の特性の一端をみいだしたい。

なお、ブラジル移民青年隊という用語について、たとえば1982年8月にブラジルで行われた着伯25周年記念式典の式辞や祝辞をみると、「ブラジル移民青年隊」や「移民青年隊」、「青年隊」、「ブラジル移住青年隊」、「沖縄県ブラジル移民青年隊」、「在伯移民青年隊」、「在伯沖縄移民青年隊」をはじめ、各人によりさまざまな用語が用いられている。また、ブラジル移民青年隊に参加し移住した者については「隊員」と記されている¹⁶⁾。一方、ブラジル移民青年隊の詳細な動向が判明する『創立三十五周年記念誌 青年隊のあゆみ』では「(五) 沖縄産業開発青年隊」や「2. ブラジル移民青年隊」において、沖縄青年連合会が本土の産業開発青年運動を導入して沖縄産業開発青年隊を創設し、同隊の事業の一環として「ブラジル移民青年隊」を送出したと記される。同隊ではアルゼンチンなどへも移民青年隊員を送出している¹⁷⁾。そこで、本稿では同資料にならない、この移民事業名については「ブラジル移民青年隊」、移民事業に参加し移住した者については「ブラジル移民青年隊員」を用いる。

Ⅱ. ブラジル移民青年隊の概要

1. 成立経緯

はじめに、ブラジル移民青年隊の成立経緯について、本土復帰前の沖縄県の移民事業を踏まえ概観する。

第二次世界大戦後の沖縄県では引揚による人口急増により、再び海外移民を希望する意識が強まった。とくに、旧南洋群島からの引揚者が多かったため、同地への再移住の希望が強かったが実現しなかった。一方、沖縄県から最初の戦後移民として、1948年にアルゼンチンへの呼寄移民が送出された。同年に沖縄海外協会(1953年に琉球海外協会へ改組、1964年に沖縄海外協会、1973年に沖縄県海外協会へ改称)、1951年には沖縄群島政府経済部移民課(1952年に琉球政府総務局移民課、1953年に社会局移民課、1961年に経済部移住課へ移管)が設置され、琉球政府独自の移民事業が進展した。1954年には移民金庫が成立し、移住者に対し渡航費などの融資と土地の処分や管理が可能となり、1960年には琉球海外移住公社が業務を引き継いだ。このような状況下、1954年よりボリビア計画移民の送出が始まり、1964年まで3,221人が移住した。1967年には海外移住事業団沖縄事務所がこれらの業務を継承し、復帰に先立ち日本本土の移民事業と一体化した¹⁸⁾。

また、沖縄県では第二次世界大戦後の青年人口の増加や生活環境の改善が課題となっていた。そこで、1948年に青年の修養機関の中央組織として沖縄青年連合会(以下、沖青連と略記)が結成され、1950年代前半には「村おこし運動」が盛んに行われた。一方、本土では1951年に日本青年団協議会(以下、日青協と略記)が設立され、1953年に沖青連は日青協へ加入した。日青協では1950年代前半よりアメリカ合衆国のC・C・C運動をもとに、農林省の二三男対策や建設省の国土総合開発計画と関わって産業開発青年運動が開始された。その一環として1956年より南米産業開発青年隊の送出が始まり、1983年までに326人が移住した。1954年には沖青連でもこの運動の導入を決め、沖縄県の青年を本土各地の産業開発青年隊へ派遣した。彼らの帰還後の1955年に沖縄産業開発青年隊が設立され、名護町(現・名護市)にキャンプを設置して沖縄本島北部のダム建設などに従事しながら訓練を行った。そして、1956年に琉球海外協会や琉球政府、在伯沖縄協会の協力を経てブラジル移民青年隊の送出が始まり、1964年までに300人が移住した。また、ブラジルへの家族移住や女子青年隊、アルゼンチン移民青年隊、八重山開拓移住者、本土集団就職者の送出や、沖縄産業開発青年隊の修了者が個別にボリビアへ移住する事例もみられた。1957年にはこれらの活動を強化するため沖縄産業開発青年協会が設立された¹⁹⁾。沖縄産業開発青年隊は名護町から大宜味村(1957年)や大里村(1958年)、今帰仁村(1959年)を経て1960年に東村へキャンプを常設し、2021年現在も土木建築や農業などに関わる青年の人材育成活動を継続している。

ブラジル移民青年隊は瑞慶覧長仁が中心的な役割を果たした。彼は大里村（現・南城市）出身で、兵役を経て第二次世界大戦後は大里村農業信用協同組合の役員や大里村の青年会長などとして村の復興に尽力し、さらに沖縄青年連合会会長や沖縄産業開発青年協会理事長、琉球政府立法院議員などを歴任した人物であった²⁰⁾。このように、ブラジル移民青年隊は第二次世界大戦後の引揚や人口急増、農村青年対策の一環として展開した。

2. 事業内容

ブラジル移民青年隊を送出した沖縄産業開発青年隊は、「将来、海外移民を希望する青年、あるいは郷土の中堅として活躍しようとする青年たちに、毎日一定の実習と講義を行い、農業技術や機械、その他の技術を修得させ、自主的な共同生活を通じて、「働きながら学ぶ」ことの中から、良識ある協調の精神と、たくましい開拓精神を養成」することを目的としていた。入隊後はキャンプで6か月間の訓練を行った²¹⁾。募集対象者は「この運動が、二、三男対策から出発し、二、三男問題解決への運動であるが故に、尚沖縄のおかれている立地条件から必然的移民送出の問題とも関連して二、三男を優先とする」（「青年隊銓衡要項」の「一、基本方針」の2項）とされ、選出方法は「各地区一名を基準とする。但し同一条件の場合に限りこれを原則とし、あくまでも基本方針に沿って人物本位とする」（「二、原則選出」）と定められた²²⁾。ブラジル移民青年隊については琉球政府社会局移民課が市町村を通じて募集し、面接などの審査を行い決定した。渡航費は琉球政府が貸し付けた。移住後の入植先は在伯沖縄協会が指定し、4年契約で農業に従事すると取り決められた²³⁾。

なお、ブラジル移民青年隊と関わり女子青年隊が存在した。女子青年隊は「将来、海外へ移民しようとする女子青年と、郷土農村の中堅婦人として活躍しようとする女子青年たちを集め、“働きながら学ぶ”共同生活を通じて、海外移民として、また農村婦人として必要な知識と技能を習得させ、よりよい農村婦人を養成する」ことを目的としていた。1960年に設置され、1962年の第5回までに65人が修了したが、施設の不備や社会情勢の変化などにより中止された²⁴⁾。

3. 隊員数の推移

図1は琉球政府の刊行した『南米移住への道』²⁵⁾と沖縄県の刊行した『国際交流関連業務概要』²⁶⁾をもとに、沖縄県からの戦後移民とブラジル移民青年隊員の推移を示した。戦後移民の総計は1948年の34人を最初に増加し、1957年の1,998人を最多として1950年代後半から1960年代前半に多数みられた。1960年代前半以降や1972年の本土復帰後は沖縄県内や本土での就業の増加などに伴い減少し、1993年の4人を最後に送出が終了した。また、戦後移民の大半はブラジル移民であり、1957年の1,335人を最多として、戦後移民

第二次世界大戦後における沖縄県からのブラジル移民青年隊の移住過程

(花木宏直)

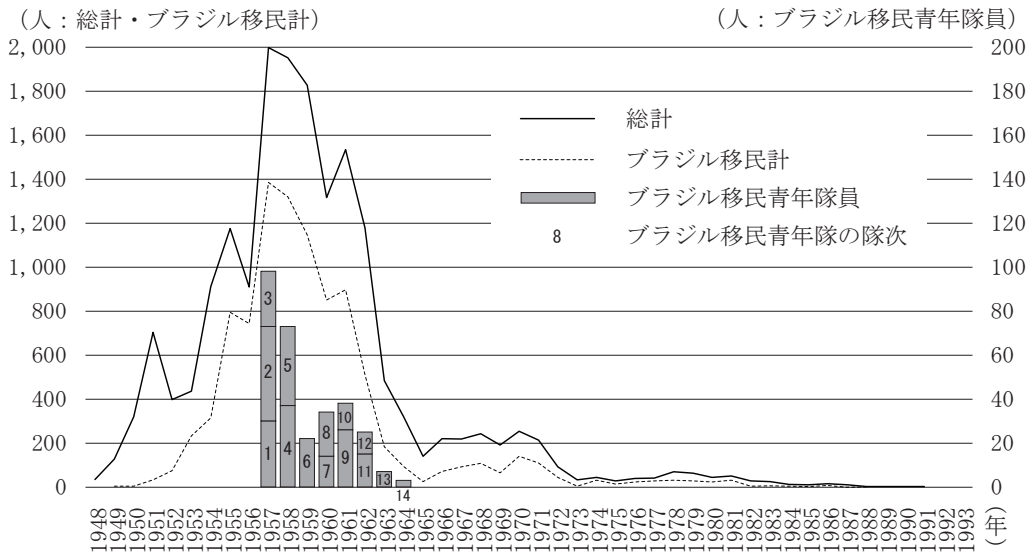


図1 沖縄県からの戦後移民とブラジル移民青年隊員の推移
 琉球政府農林局移住課編（1966），沖縄県知事公室国際交流課編（1995）より作成。

の総計と同様な増減傾向がみられた。

ブラジル移民青年隊員については、1957年4月の第1次30人を最初とし、同年9月の第2次43人が最多となり、10月には第3次25人も送出された。その後は毎年1～2次、1次あたり10～30人程度送出されたが、漸次減少していき、1964年の第14次3人を最後に送出は終了した。図1に示した者以外にも、家族移住が7組、女子青年隊が5人や、青年隊訓練所出身者でブラジル移民青年隊に参加せず移住した者が6人みられた²⁷⁾。沖縄県からのブラジル移民青年隊員ではなく、日本本土の南米産業開発青年隊員として移住した沖縄県出身者も4人いた²⁸⁾。1959～1972年にはブラジルだけでなくアルゼンチンへの移民青年隊員も計48人送出された²⁹⁾。

このように、ブラジル移民青年隊員は沖縄県からの戦後移民およびブラジル移民の中でも少数にとどまっていた。しかし、1950年代後半から1960年代前半の戦後移民の最盛期に送出され、農業開拓を目的とした公募移住という特性をもっていたことから、戦後移民やブラジル移民の特性を検討する上で重要な対象と位置づけられる。

Ⅲ. ブラジル移民青年隊の移住過程

1. 出身地

図2はブラジル移民青年隊の名簿をもとに³⁰⁾、隊員300人の出身地を示した。1960年当時の市町村別で1位は大里村20人であり、2位金武村（現・金武町）18人、3位那覇



図2 ブラジル移民青年隊員の出身地

市町村境は1960年当時のものである。

沖縄産業開発青年協会編(1962, 1980)より作成。

市16人、4位国頭村15人で15人を上回っていた。最多となった大里村は、ブラジル移民青年隊の中心的な役割を果たした瑞慶覧長仁の出身地であった。一方、沖縄本島と久米島、宮古島については、各市町村とも数人から10人程度みられ、送出地域がおおよそ偏りなく分散している。この要因として、II章2節で述べたように沖縄産業開発青年隊は「各地区一名を基準」としていたため、多くが沖縄産業開発青年隊の修了者であるブラジル移民青年隊員の出身地も分散したと指摘できる。

なお、『移民青年隊着伯二十五周年記念誌』にはブラジル移民青年隊員の「海外での生活経験」が調査されている。それによれば33人が該当し、内訳は日本本土13人、南洋群島8人、フィリピン群島4人、満洲3人、台湾2人、ハワイ2人、シンガポール1人であった³¹⁾。ブラジル移民青年隊員には南洋群島をはじめ外地からの引揚者や、本土への出稼ぎや疎開からの帰郷者が一定数みられた。

また、高校以上の出身学校に注目すると³²⁾、南部農林高校（現・豊見城市）44人が最も多く、中部農林高校（現・うるま市（旧具志川市））39人や北部農林高校（現・名護市）24人、辺土名高校（現・大宜味村）15人で10人を上回っていた。農林高校では他にも、宮古農林高校（現・宮古総合実業高等学校、宮古島市（旧平良市））の7人がいた。1950年代頃は移民教育の重要性が高まる中で学校などでの移民クラブ活動が盛んであり、南部農林高校でも移民研究グループの活動や移民教育の一環として八重山地方での開拓実習などを行っていた³³⁾。南部農林高校の8期生（1955年4月入学、1958年3月卒業）で1958年12月に第5次ブラジル移民青年隊員となった者の回想録によれば、3年次（1957年）の頃が移民クラブの活動が活発で、人気があり女子部員も多く、文化祭では「雄飛船」という海外渡航の様子を模した仮装行列などを催した。中部農林高校や北部農林高校とともに南中北農移民同志会も結成され、年2回の総会では海外移民についての意見交換や交流を行った³⁴⁾。農林高校での移民教育の活発さが、ブラジル移民青年隊員に占める農林高校出身者の多さにつながったといえよう。

沖縄産業開発青年隊との関わりを詳しくみると、名簿上は300人中222人が沖縄産業開発青年隊の修了者であった。他の者については、琉球農林省の設立した農業研究指導所研修生の修了生が26人、本土各地の産業開発青年隊への派遣者4人などがいた。一方、44人については沖縄産業開発青年隊の修了者名簿で比定できなかった。この点について、ブラジル移民青年隊は沖縄産業開発青年隊の一環としての事業であったが、先述の通り募集は沖縄産業開発青年隊ではなく琉球政府が市町村を通じて行ったため、必ずしも沖縄産業開発青年隊の修了者が参加したわけではなかったと推察される。

2. 入植先と身元引受人

図3にはブラジル移民青年隊員の入植先を示した。最多はマッドグロッソドスル州カンポグランデの50人であり、サンパウロ州のサンパウロ43人やカンピーニャス26人、トッパン21人、ラポーゾタバレス17人で10人を上回っていた。サンパウロ州内陸部やサントス（7人）から南西ヘラポーゾタバレスなどを経由するジュキア線沿線、パラナ州北部のカンバラ（9人）やノーバロンドリーナ（7人）などをはじめ、各地に入植先が分散していた。一方、サンパウロやサンパウロ都市圏にも多く移住したことも注目される。

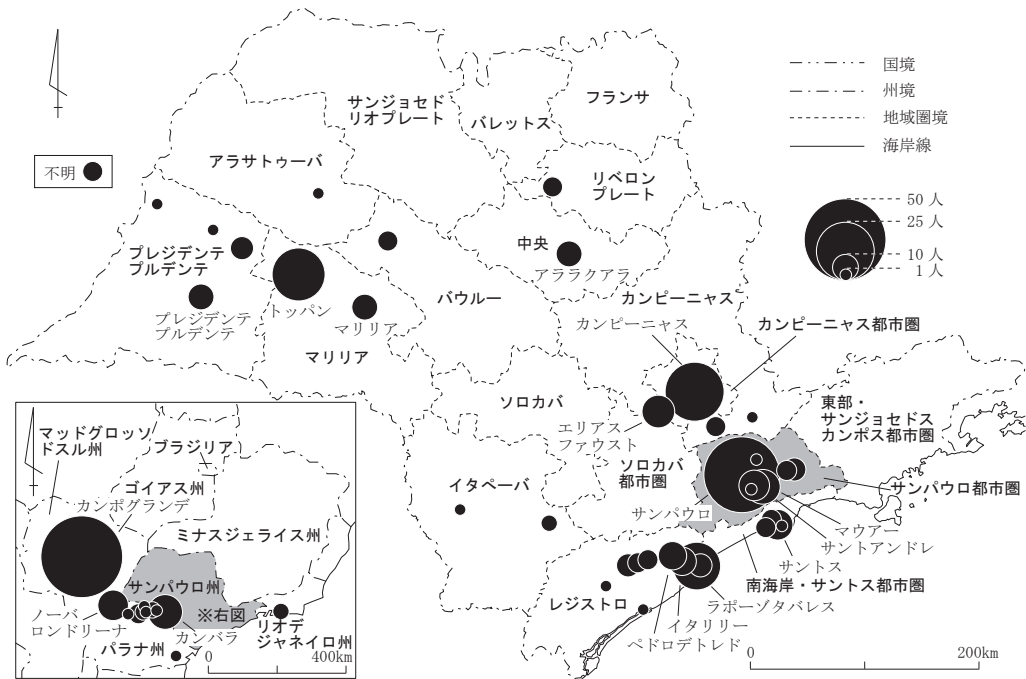


図3 ブラジル移民青年隊員の入植先——1957～1964年——
 沖縄産業開発青年協会編（1962，1980），在伯沖縄青年協会編（1984）より作成。

表1には3人以上を受け入れた主な身元引受人を挙げた。1926年に移住しラポータバレスおよびサンパウロでバナナ栽培やディーゼルエンジン販売業を営んだ羽地村（現・名護市）出身の花城清安は10人を受け入れ、全員が第1次の移住者であった。1916年に移住しカンボグランドで農場やコーヒー製粉工場を営んだ名護町出身の大城武盛と、1938年に移住しサンパウロ州エリアスファウストやサンパウロで農業や煉瓦工場、野菜仲買に従事した知念村（現・南城市）出身の新垣源次郎はいずれも9人を受け入れ、前者は9人中6人が第2次、後者は9人中5人が第2次の移住者であった。彼らをはじめ、戦前移民の大規模農家が早期のブラジル移民青年隊員を多数受け入れた。

一方、2人を受け入れた身元引受人は30人、1人のみを受け入れた身元引受人は181人であった。これらの者は『在伯沖縄県人五十年の歩み』などの人物誌にほとんど登場せず³⁵⁾、大規模農家や移民の有力者というよりは一般的な移民としての位置づけであったと推察される。また、サンパウロやサンパウロ都市圏への入植の多さから、身元引受人にはシャーカラという野菜の近郊農業に従事する中小規模農家³⁶⁾が少なからず存在した様子が見える。

(花木宏直)

表1 主な身元引受人

氏名 (移住年)	出身地	居住地	職業 (1950年代後半頃)	受入者
花城清安 (1926)	国頭郡羽地村 振慶名	サンパウロ州ラポーゾ タバレス/サンパウロ	バナナ栽培(ラポーゾタバレス) /ディーゼルエンジン販売業経営 (サンパウロ)	第1次10人
大城武盛 (1916)	国頭郡名護町 名護	マッドグロッソドスル 州カンボグランデ	農場, コーヒー製粉工場経営	第2次6人 第11次1人 第13次2人
新垣源次郎 (1938)	島尻郡知念村 久手堅	サンパウロ州エリアス ファウスト/サンパウ ロ	トマト, 野菜栽培, 煉瓦工場経営 (エリアスファウスト) / 野菜仲 買(サンパウロ)	第2次5人 第5次2人 第11次2人
新垣清吉 (1928)	島尻郡東風平 村東風平	マッドグロッソドスル 州カンボグランデ	綿, バナナ栽培, コーヒー園, 牧 場, 製材所経営	第2次5人 第3次1人 第4次1人
宮城新昌	—	パラナ州ノーバロンド リーナ	—	第2次5人 第4次2人
諸見里安友 (※1935 /1955)	中頭郡美里村 美里	サンパウロ州マウアー /サンカエターノドスル	馬鈴薯, トマト栽培(マウアー) /飲料店経営(妻)(サンカエ ターノドスル)	第1次2人 第4次▲1人 第5次1人
山城興長 (1931)	島尻郡東風平 村富盛	マッドグロッソドスル 州カンボグランデ	米, バナナ栽培, 小学校教員 (妻)	第3次2人 第5次▲2人
金城良照 (1934)	島尻郡高嶺村	サンパウロ州カンピー ニャス	トマト, 野菜栽培	第6次1人 第7次1人 第11次1人
賀数亀助 (1938)	那覇市小禄	サンパウロ州トッパン	コーヒー園経営, 各種作物栽培	第1次1人 第3次1人 第4次▲1人
照屋盛吉	—	サンパウロ州ブライア グランデ	—	第1次1人 第2次1人 第4次▲1人

3人以上受け入れた者を記した。—は不明, ▲は名簿上と実際の身許引受人の異なる事例を示す。諸見里安友は1935年にペルーへ移住し, アルゼンチンを経て, 1955年にブラジルへ転住した。

城間編(1959), 在伯沖縄青年協会編(1984)より作成。

また, II章2節で確認したように, ブラジル移民青年隊員は在伯沖縄協会が指定した身元引受人のもとへ入植し, 4年契約で農業に従事することになっていた。しかし, 『移民青年隊着伯二十五周年記念誌』に収録されたブラジル移民青年隊員の略歴によれば³⁷⁾, 契約期間は特定できた172人のうち1年が110人, 2年が39人, 3年が13人, 4年が2人などであった。さらに, 30人については名簿と『移民青年隊着伯二十五周年記念誌』に収録されたブラジル移民青年隊員の略歴で身元引受人が異なっており, 表1にも5例含まれていた。入植先では農業手伝に従事する者だけでなく, 商業や商店手伝が6人, 鮮魚店手伝2人, 漁業手伝や工場手伝, 洗濯業手伝, 縫製業手伝が1人ずつみられた。

身元引受人の属性についても, ブラジル移民青年隊員の父が1人, 兄が1人, 叔父が1人, 親戚が2人おり, 家族や親戚が受け入れた事例がみいだされた。中には, ブラジルで生ま

れ第二次世界大戦前の幼少期に父の出身地である伊平屋村へ帰国し、戦後に工場を経営する父のもとへブラジル移民青年隊により再移住した者もいた³⁸⁾。ブラジル移民青年隊員には帰来2世がいたことや、実質的に帰来2世の呼寄のためにブラジル移民青年隊が活用された事例として興味深い。

つまり、ブラジル移民青年隊員には取り決め通りに4年契約で農業に従事した事例が少なかった。農林学校の卒業生や沖縄産業開発青年隊の修了者ではない者も移住し、多くは1～2年契約であり、内陸部の大規模農家ではなく都市近郊の中小規模農家への入植も多く、入植先では農業以外にも従事した。受入者数は大半が1人であり、家族や親戚も身元引受人となった。これらの事例を踏まえると、ブラジル移民青年隊は結果的に近親者による呼寄移民に類似した側面が強かったと指摘できる。

3. 独立後の動向

図4は1982年におけるブラジル移民青年隊員の居住地を示した。図3と比較すると、1957年の第1次の送日から25年を経て居住地が大きく変化した様子がわかる。

最多の居住地はサンパウロの104人であり、サンパウロ近郊のサントアンドレ13人をはじめサンパウロ都市圏に集中していた。サンパウロだけでなく、1960年に建設された首都ブラジリアにも7人が居住していた。一方、当初50人が入植したカンポグランデは1982年には7人とどまるなど、内陸部の居住者が大きく減少した。さらに、帰国者が75人おり、アルゼンチン転住者6人とボリビア転住者5人、ペルー転住者2人をはじめブラジル以外への居住地移動も多数みられた。

ブラジル居住者の職業に注目すると、『移民青年隊着伯二十五周年記念誌』では「農業や商業、工業、サービス業、会社員、その他」に分類して集計しているが³⁹⁾、実態がわかりにくい。そこで、表2は同資料に収録されたブラジル移民青年隊員の略歴より、1982年の職業を示した。実数として176人、2～3業種の兼業者がいたため延べ183人分が判明した。職種別では農業40人、野菜やパステル（揚げ餃子のようなスナック）などのフェイラ38人、雑貨店などの商業37人、パール（酒類も提供する軽食店）や常設のパステル店などの飲食業25人、縫製業14人、その他29人となっていた。その他には野菜などの仲買7人などが含まれていた。地域別でみると、サンパウロではフェイラ24人や商業14人が多く、縫製業14人についてはサンパウロのみに存在した。サンパウロ都市圏では農業14人が多く、フェイラも10人みられた。内陸部などのその他の地域では農業16人が多く、商業や飲食業8人を大きく上回っていた。ブラジル移民青年隊員が内陸部から都市へと居住地移動する中で、農業からフェイラ、常設店舗による商工業やサービス業へと展開した様子がうかがえる。とくにフェイラは都市における財産形成の初期段階として、ブ

第二次世界大戦後における沖縄県からのブラジル移民青年隊の移住過程

(花木宏直)

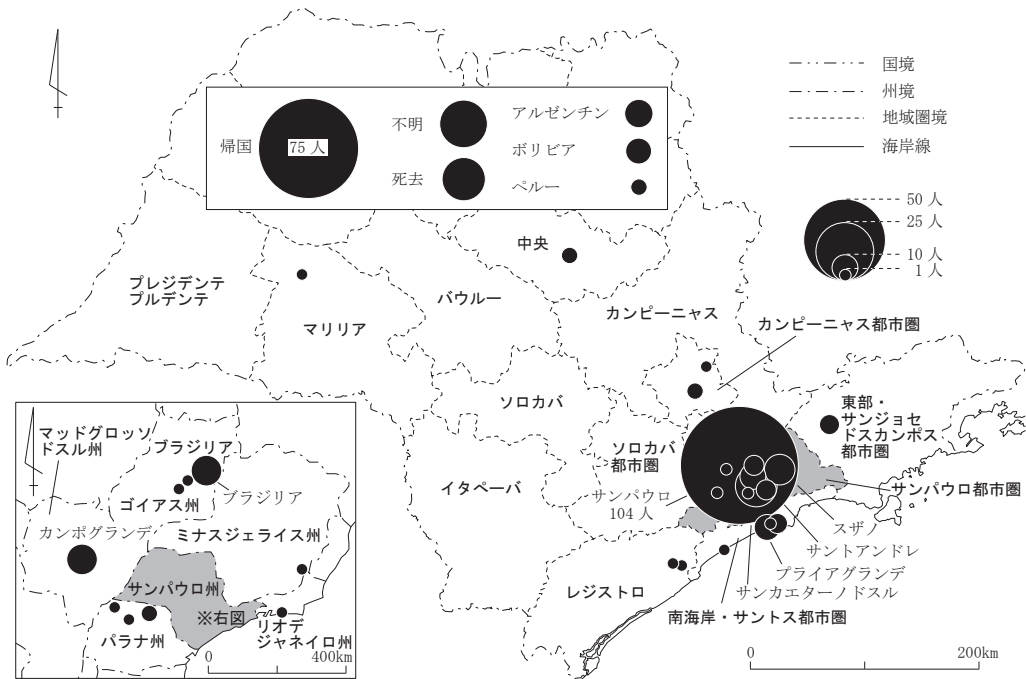


図4 ブラジル移民青年隊員の居住地——1982年頃——

在伯沖縄青年協会編（1984）より作成。

表2 ブラジル移民青年隊員の職業——1982年頃——

(人)

地域	農業	フェイラ	商業	飲食業	縫製業	その他	計
サンパウロ市	10	24	22	14	14	18	102
サンパウロ都市圏	14	10	7	3	0	2	36
その他	16	4	8	8	0	9	45
計	40	38	37	25	14	29	183 (176)

1982年頃のブラジル在住者のみ集計した。人数は延べ人数である。

在伯沖縄青年協会編（1984）より作成。

ラジル移民青年隊員に限らず沖縄県からの戦後移民が多数従事した⁴⁰⁾。

ブラジル移民青年隊員の回顧録や伝記によれば、カンポグランデでは県人会支部の方針として入植先からの早期独立に対する規制が強かったことや、戦前移民からの差別もあり、農業での自立が難しかった⁴¹⁾。サンパウロ州ラポーゾタバレスでは入植先の月給が安価であった上に、身許引受人が給与の未払いに陥る事例もあった⁴²⁾。また、農業は大資本が必要であるため小資本で起業できる商業に従事する傾向や、農業で自立しても1970年代以降にブラジル政府が農業労働者の最低賃金や社会保障を制度化したため経営規模が大きい

ほど利益が出にくい状況も生じた⁴³⁾。既往研究の指摘した地代の上昇にとどまらないさまざまな要因による農業での自立の難しさゆえ、都市への居住地移動や農業以外への職業変化につながった。

IV. ブラジル移民青年隊の実態——八重瀬町出身者に注目して——

1. 八重瀬町出身者の概要

続いて、ブラジル移民青年隊の実態について、八重瀬町出身者に注目し検討する。八重瀬町は沖縄本島南部に位置し、2006年に東風平町（1979年以前は東風平村）と具志頭村が合併し成立した。ブラジル移民青年隊員は具志頭村出身者が7人、東風平村出身者が6人おり、他に具志頭村出身の家族移住1人、女子青年隊1人、日本本土の南米産業開発青年隊1人、東風平村出身の家族移住1人の計17人存在した。また、後述の通り南部農林高校出身者が多数含まれていた。八重瀬町は沖縄本島南部の典型的なブラジル移民青年隊の送出地域と位置づけられる。

筆者は2019年10月にブラジルで現地調査を行い、八重瀬町出身のブラジル移民青年隊員のうち7人に対し聞き取りを実施した⁴⁴⁾。また、他の者については7人への聞き取りで得られた断片的な動向と、『移民青年隊着伯二十五周年記念誌』所収の略歴をもとにある程度の経歴が判明した⁴⁵⁾。これらの資料をもとに、彼らの動向を検討する。

表3は八重瀬町出身のブラジル移民青年隊員の概要を示した。出身地は具志頭村破名城地区4人や具志頭村具志頭地区4人、東風平村富盛地区3人をはじめ各地区に分散していた。no.10は南洋群島のサイパンで生まれ、引揚により東風平村高良地区で育った。Aについても父母はペルー移民の経験があり、第二次世界大戦前に兄2人（長男と二男）を残して帰郷した後、Aが破名城地区で生まれ具志頭地区で育った。このように、彼らの中には外地や海外からの引揚者の家族も含まれていた。出身世帯の職業は農業が多く、no.13は軍作業に従事していた。

移住前の経歴をみると、高校卒業以上の者は10人おり、うち7人が南部農林高校の出身であった。また、13人が産業開発青年隊、2人が農業研究指導所研修生、1人が女子青年隊の修了者であった。移住時期は第3次が4人、第2次と第4次が2人などに分散していた。

ブラジル移民青年隊に参加した動機について、no.4は父がフィリピン移民を経験しており海外に興味があったことや、南部農林高校で修学し農業に興味をもったこと、当時の沖縄県では米軍基地の多さに伴う生活負担の大きさや伊佐浜地区（現・宜野湾市）における米軍の土地接収に伴う海外への強制移住の問題があり、沖縄県を助ける大規模な土地がほしいという意志をもったため、移住を希望した。一方、no.13は軍作業の先輩で

第二次世界大戦後における沖縄県からのブラジル移民青年隊の移住過程

(花木宏直)

表3 八重瀬町出身のブラジル移民青年隊員の概要

no.	出身地	出身高校	研修	隊次	移住年月	身元引受人	身元引受人出身地	配耕地
A	具志頭村具志頭／破名城	—	青年隊1期	日本2次	1957年2月	モウラ・アンドラジーナ	ブラジル人	マッドグロッツドスル州ノーバアンドラジーナ
1	具志頭村安里	南部農林高校	農業研究指導所研修生	2次	1957年9月	新垣源次郎→久手堅▲	知念村久手堅→知念村	サンパウロ州エリアスファウスト
2	具志頭村破名城	知念高校	青年隊1期	2次	1957年9月	新垣源次郎	知念村久手堅	サンパウロ州エリアスファウスト
3	具志頭村破名城	南部農林高校	青年隊4期	3次	1957年10月	新垣源次郎	知念村久手堅	サンパウロ州エリアスファウスト
4	東風平村世名城	南部農林高校	青年隊4期	3次	1957年10月	国吉真栄	—	パラナ州カンバラ
5	東風平村富盛	南部農林高校	青年隊4期	3次	1957年10月	山城興長	東風平村富盛	マッドグロッツドスル州カンボグランデ
6	東風平村富盛	南部農林高校	青年隊4期	3次	1957年10月	山城興長	東風平村富盛	マッドグロッツドスル州カンボグランデ
7	東風平村東風平	糸満高校	—	3次	1957年10月	新垣清吉	東風平村東風平	マッドグロッツドスル州カンボグランデ
8	具志頭村具志頭	知念高校	青年隊6期	4次	1958年6月	城間謙正→嘉数忠治▲	— →具志頭村	サンパウロ州トッパン→サントアンドレ
9	東風平村	—	農業研究指導所研修生	4次	1958年6月	屋富祖秀実	—	サンパウロ州ビグアー
10	東風平村高良／サイバン	南部農林高校	青年隊6期	5次	1958年12月	山城興長→嘉数カマ▲	東風平村富盛→東風平村伊波	マッドグロッツドスル州カンボグランデ
11	具志頭村仲座	—	青年隊7期	6次	1959年10月	平田嗣保→平田正保▲	佐敷村仲伊保—	サンパウロ州サンパウロ
B	具志頭村破名城	—	青年隊5期	家族移住	1961年3月	伊森武一	具志頭村具志頭	サンパウロ州サントアンドレ
C	東風平村富盛	南部農林高校	青年隊23期	家族移住	1962年10月	野原弘	東風平村富盛	サンパウロ州サンパウロ
12	具志頭村具志頭	—	青年隊8期	12次	1962年10月	宮里勇夫	—	サンパウロ州ジュンディアイ
D	具志頭村破名城	首里高校	女子青年隊5期	—	1963年3月	no.8	具志頭村具志頭	サンパウロ州サンパウロ
13	具志頭村具志頭	—	青年隊9期	13次	1963年10月	真保栄戸基	具志頭村具志頭	サンパウロ州サンパウロ

▲は変更後の身元引受人，—は不明を示す。

聞き取り，在伯沖縄青年協会編（1984）より作成。

あり先にブラジル移民青年隊で移住した no.12 と文通する中で，ブラジルに憧れ移住を決意した⁴⁶⁾。no.1 は農業研究所で講習を受けた際にハワイなど海外の農家の大規模さに圧倒されて海外への移住を希望し，1年後にたまたまブラジル移民青年隊の募集を聞いて急ぎ手続きした。A はペルーから帰郷した父母がペルー在住の兄（長男）との同居を希望しており，両親をペルーに再移住させるために入隊すれば南米に行けるという沖縄産業開発青年隊に参加した。つまり，農林高校や農業研修所での修学や，米軍統治下における沖縄県の社会的課題を海外での農業開拓で解決したいという意志がブラジル移民青年隊への参加の動機につながった側面もみられたが，海外への憧憬や家族の再移住のほう助など動機はさまざまであり，かつ農業開拓という本来の移民事業の目的とは異なる様子が少なからず認められた。

2. 入植先と身元引受人

表3には身元引受人や入植先も示した。身元引受人について、no.1とno.2、no.3は新垣源次郎、no.5とno.6、no.10は山城興長、no.7は新垣清吉をはじめ、表1に登場する主な身元引受人のもとへ移住した事例が多かった。東風平村富盛地区出身の山城興長は富盛地区出身のno.5とno.6、高良地区出身のno.10、東風平村東風平地区出身の新垣清吉は東風平地区出身のno.7を受け入れた。具志頭村出身の3人を受け入れた新垣源次郎については知念村久手堅地区出身であったが、知念村は具志頭村の東部に近接している。身元引受人には戦前移民で大規模農家という側面に加え、同郷者や出身地の近い者が指定された様子が見える。1人のみ受け入れた身元引受人についても、具志頭地区出身のno.13や富盛地区出身のCをはじめ、大半が同郷者であった。

一方、no.1とno.8、no.10、no.11の4人については、名簿上の身元引受人と実際の身元引受人が異なっていた。このうち、no.1はサンパウロ州エリアスファウストの新垣源次郎を身元引受人とし、no.2やno.3をはじめ計6人で入植する予定であった。しかし、同地に知念村出身の別の戦後移民がおり、ブラジル人を雇用することが難しい状況にあった。そこで6人でくじ引きをして、no.1ら2人が後者の農場に入植することになった。no.10はマッドグロッソドスル州カンボグランデの山城興長を身元引受人としたが、彼のすすめで商業に従事することになり、東風平村伊覇地区出身の嘉数カマのもとで木炭の仲買に従事した。no.8については当初はサンパウロ州トッパンの親戚にあたる城間謙正を身元引受人としたが、20日ほど滞在した後、すぐに母方の従兄弟である嘉数忠治を身元引受人としてサンパウロ都市圏のサントアンドレへ転住し野菜栽培に従事した。

また、図5と表4には八重瀬町出身のブラジル移民青年隊員17人の居住地と経歴を示した。このうち表4より、女子青年隊員でno.8と結婚したDを除く16人の入植時の動向をみると、no.10は4年間従事したが大半は1～2年程度であった。内容は農業手伝が多かったが、先述の通りno.10は木炭仲買に従事した。no.11とC、no.13はサンパウロ、Bはサントアンドレと、内陸部だけでなく都市近郊にも入植した。このように、指定された身元引受人のもと4年契約で農業に従事するという取り決めとは異なり、身元引受人の判断や都合、同郷者や親戚のつてによる入植先の変更や、契約期間の短期化、農業以外への従事をはじめ柔軟な対応がみられた。

3. 独立後の動向

さらに、図5と表4をもとに独立後の居住地や職業の動向について検討を進める。独立直後の1950年代後半から1960年代前半の様子に注目すると、no.2とno.3は同期の隊員2

(花木宏直)

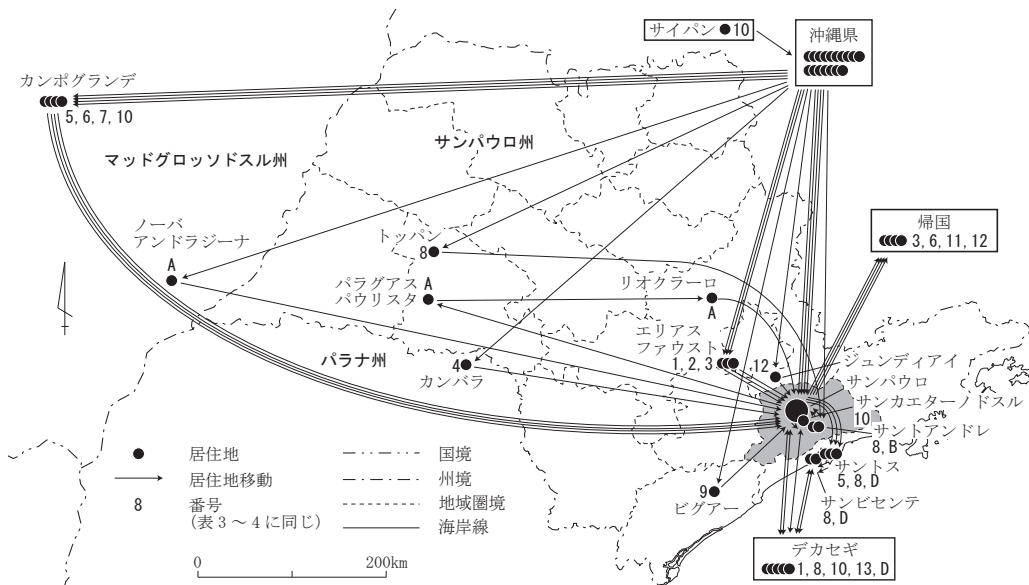


図5 八重瀬町出身のブラジル移民青年隊員の居住地移動

サンパウロ市内は省略した。

聞き取り，在伯沖縄青年協会編（1984）より作成。

人とともに，エリアスファウストにて沖縄県出身の農家もとでトマト栽培に従事した。その後はサンパウロへ転住し，no.3についてはno.11 ととも野菜のフェイラを経営した。さらに，no.11 はエリアスファウストからサンパウロへ転住したno.1 とともに，アグアリオスという野菜の栽培や野菜のフェイラを共同で経営した。カンボグランデに入植したno.5 とno.6 については，サンパウロへ転住して共同でフェイラを経営し，C もこのフェイラで就業した。no.12 とno.13 についても，サンパウロで果物のフェイラを共同経営した。このように，独陸後は同郷のブラジル移民青年隊員同士で農業やフェイラを共同経営する事例が多数みうけられた。

1960年代半ばから1970年代をみると，no.1 とno.2，no.11，C をはじめ，農業や野菜などのフェイラの単独経営が増加した。no.5 およびno.8 とD の夫婦についても，サンパウロの外港である港湾都市サントスや隣接するサンピセンテにて野菜や鶏卵のフェイラを単独経営した。単独経営に移行した経緯について，no.1 は土地開発により農業経営が困難になった際にno.11 と分離してフェイラの経営に一本化した。no.13 については結婚に伴いno.12 との果物のフェイラの共同経営を辞め，タクシー運転手へ転職し，さらにパステルのフェイラやバールの単独経営などに従事した。加えて，no.1 はエリアスファウスト在住時の1960年頃に農業の共同経営から単独経営へ移行したが，これは共同経営の相手が結

表4 八重瀬町出身のブラジル移民青年隊員の経歴

no.	経歴												
	1955～	1956～	1957～	1958～	1959～	1960～	1961～	1962～	1963～	1964～	1965～	1970～	1975～
A	1957移住 △A	※1	△B										→会社員
1	1957移住 △B	○B	●B	○B(11)	○B・◇B(11)	◆B							
2	1957移住 △B	△(3)	◆										
3	1957移住 △B	△(2)	○B(11)	1962帰国									
4	1957移住 △C	○Cf	●Cf	視察	ファゼンダ支配人								
5	1957移住 △	◇(6)		→製菓業経営	→◆								
6	1957移住 △	◇(5)		→帰国									
7	1957移住 △	○	野菜仲買										
8	1958移住 △△B	●B	※2	◆G	※3	◆B	◆E	■B					
9	1958移住 △バナナ			→修理工									
10	1958移住 ▲木炭仲買			○B	野菜仲買			◆G					
11	1959移住 △	○B(3)	○B(1)	○B・◇B(1)	◆			●B					新聞社勤務
B			1961移住 △B	→○B	→●B・◆								
C			1961移住 △	◇	◆								
12			1962移住 △	◇F(13)	→帰国								
D			1963移住 ◆G	※3	◆B	◆E	■B						
13			1963移住 △E	●Cc	◇F(12)	タクシー運転手	◆P	◆P・■R					

no.	経歴												
	1980～	1981～	1982～	1983～	1984～	1985～	1986～	1987～	1988～	1989～	1990～	1995～	2000～
A	会社員												→退職
1	◆B												★神奈川県藤沢市・自動車工場など
2	◆												→退職
3	1962帰国												
4	■G												
5	◆												→死去
6	帰国												
7	野菜仲買												→不明
8	■B												★横浜市鶴見・配管工事
9	修理工												→不明
10	◆F												★神奈川県など
11	新聞社勤務												→帰国
B	●B・◆												→退職
C	◆												→退職
12	帰国												
D	■B												★横浜市鶴見・梱包作業、店員
13	◆P・■R・※4												★横浜市鶴見・工事現場など

 : サンパウロ市・サンパウロ都市圏 : その他 (11) : 共同経営相手
 △ : 農業労働 ◇ : フェイラ共同経営 A : 米 E : 鶏卵 R : 飲食店 ※1 : 菓子配達
 ▲ : 商業労働 ◆ : フェイラ単独経営 B : 野菜 F : 果物 ・ パール ※2 : 菓子工場勤務
 ○ : 農業共同経営 ■ : 商業・飲食業単独経営 Cc : シュシュ G : 日用雑貨 ※3 : 港湾荷役
 ● : 農業単独経営 ★ : デカセギ Cf : コーヒー P : パステル ※4 : 不動産店勤務・再生タイヤ店共同経営

年次の一部は推定である。

聞き取り，在伯沖縄青年協会編（1984）より作成。

婚し独立したためであった。蓄財や時代状況への対応に加え，結婚が単独経営への移行の大きな契機となっていた。

同時期には内陸部からサンパウロへの転住も継続した。no.3は1970年代前半にサンパウロ州リオクラーロからサンパウロへ転住して会社員に就業したが，これは地方では日本語学校がないため，子どもへの日本語教育の充実が転住の大きな要因となった。no.4はパラナ州カンバラでファゼンタ支配人に従事していたが，長男の中学校入学を契機に教育環境の充実したサンパウロへ転住し雑貨店を経営した。no.11は1970年に義父（妻の父）の勧めで生活環境のよりよいサンパウロへ転住して日用品やパステルのフェイラに従事し，

さらにサンパウロ都市圏のサンカエターノドスルへ転住して果物のフェイラに従事した。経済的側面にとどまらず、子どもの教育や生活環境の充実がサンパウロへの転住の要因となった。

一方、同時期には帰国者も少なからずみられた。1962年にはno.3が帰国した他、no.6やno.12は1960年代、no.11は1980年代以降に帰国した。農業での自立が難しい中で、サンパウロへ転住して商業で自立するか、帰国が選択された。

1980年代以降についてはデカセギへの従事が注目される。デカセギの隆盛には、ハイパーインフレのため経済的に不安定な状況にあったことや、スーパーマーケットの進出によるフェイラや商業の影響などの背景がみられた⁴⁷⁾。八重瀬町出身のブラジル移民青年隊員では、いずれもフェイラや商店を営むno.1とno.10、no.13およびno.8とDの夫婦の5人がデカセギに従事した。no.1は神奈川県藤沢市の自動車工場や愛知県岡崎市の自動車部品工場、愛知県の旅館、埼玉県戸田市の弁当店、no.10は栃木県や大阪府茨木市、神奈川県平塚市、no.13は神奈川県横浜市鶴見区で工事現場のロープ引きや神奈川県厚木市、no.8は神奈川県横浜市鶴見区で配管工事、Dは同じく鶴見区で梱包作業やスーパーの店員に従事した。デカセギ先は神奈川県が多く、とくに沖縄県出身者の集住地域かつデカセギ者の多かった横浜市鶴見区の比率が高かった。

このように、ブラジル移民青年隊員は同郷者の紐帯を活用しながら、内陸部からサンパウロなどの都市へ、農業からフェイラ、商業へ、雇用労働から共同経営、単独経営、デカセギへと、おおよそ共通した居住地移動や職業の変化がみいだせた。一方、これらの移住過程はブラジル移民青年隊員の特性というより、戦前移民と戦後移民を含むブラジルないし南米移民1世の共通した特性と位置づけられる⁴⁸⁾。

V. 結論

本稿では、沖縄県からの戦後移民の中の公募移住の1つであるブラジル移民青年隊を対象とし、彼らの動向の総観を通じて戦後移民における公募移住の意義を検討した。

ブラジル移民青年隊は第二次世界大戦後の引揚や人口急増を背景とし、農村青年対策が求められる中で、沖縄青年会連合会や沖縄産業開発青年隊の活動の一環として展開した。また、公募移住という形態により、先発移民との血縁関係がなく呼寄移民が難しい者に対し移民を可能とする側面もみられた。移住者は4年契約で農業に従事した後、農業での自立を目指した。

一方、ブラジル移民青年隊員の当事者の動向に注目すると、彼らには農林高校の卒業生や沖縄産業開発青年隊の修了者が多かったが、それに該当しない者も少なからずいた。参加の動機は必ずしも農業開拓を目的としていなかった。入植先の身許引受人には戦前移民

で内陸部の大規模農家だけでなく都市近郊の中小規模農家もあり、身元引受人を変更した者や、家族や親戚を身元引受人とする者もみうけられた。身元引受人の下ではおおよそ農業手伝に従事したが、契約期間は1～2年と取り決めより短く、商業や工業手伝に従事する事例もあった。独立後は農業で自立する者は少なく、同郷者の紐帯を活用しつつ内陸部から都市へ転住してフェイラや商業に従事し、1980年代以降はデカセギも行った。これらの事例から、ブラジル移民青年隊は農業開拓を目的とした公募移住であったが、実際には近親者の呼寄によるブラジルないし南米への一般的な移住過程と相違なかった様子が明らかになった。

このような特徴が現れた要因として、受入態勢の不備や農業での自立の難しさ、ハイパーインフレの発生をはじめ、さまざまな背景が関わっていた。このことに対し、既往研究のように、農業での自立を十分支援できなかったブラジル移民青年隊の制度的課題を指摘することができる。加えて、そもそもブラジル移民青年隊員は必ずしも農業開拓を目的として移住したのではなく、海外移住それ自体を目的としていた。ゆえに、ブラジル移民青年隊は先発移民との血縁関係がなく呼寄移民が難しい者に限らず、広く海外移住の一手段として活用され、農業での自立の少なさにもつながった。そして、ブラジル移民青年隊をはじめ公募移住は、明らかに棄民性が存在しながら海外移住の門戸を確保し、あくまで結果的に沖縄県を日本有数の戦後移民送出地域へ展開させたとい意義づけられる。

最後に、沖縄県からの戦後移民の中の公募移住で最も移住者数の多かったボリビア計画移民をかえりみると、I章で概観した通りコロニアオキナワへの定着率は2割であり、多くはサンパウロへ転住して縫製業などに従事した。一方、ブラジル移民青年隊とボリビア計画移民の相違として、ブラジルには戦前移民が多数いたがボリビアには少なく、うるま病の発生など入植先の生活環境の厳しさもあり、受入態勢や自立過程の難しさに大差があったといえる。今後の課題として、ブラジル移民青年隊員の居住地移動や職業の動向のさらなる実態解明とともに、ボリビア計画移民をはじめ他の公募移住との比較分析を進め、その特性をより詳細に検討する必要がある。

付記

本研究を進めるにあたり、ブラジル在住の八重瀬町出身者の皆様、ブラジル沖縄県人会事務局の岩谷賢司氏、八重瀬町教育委員会の新垣有一郎氏、八重瀬町事務局の皆様には大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。本研究は2017～20年度科学研究費補助金(若手研究(B)、課題番号17K13581)「家族・親族関係からみた沖縄系移民の成立に関する歴史地理学研究」(研究代表者:花木宏直)にもとづく成果の一部である。

注

- 1) 石川友紀『日本移民の地理学的研究』榕樹社，1997，142-151 頁の第 2-15 表～第 2-19 表による。
- 2) 石川友紀「戦後沖縄県における海外移民の歴史と実態」移民研究 6，2010，53-55 頁。
- 3) 国際協力事業団編・発行『海外移住統計（昭和 27 年度～平成 5 年度）』，1994，24-25 頁。
- 4) 前掲 2)，53-55 頁。
- 5) 波平 聡「域外＊海外への道」（名護市史編さん委員会編『名護市史本編・5 出稼ぎと移民 IV 戦後編・展望』名護市役所，2008），71-73 頁。
- 6) 坂口満宏「出移民の記憶」（日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房，2011），94-98 頁。
- 7) 伊是名尚子「第二次大戦後における沖縄移民史の一考察——琉球政府によるボリビア計画移民を中心として——」南島史学 57・58，2001，76-112 頁。
- 8) 豊見山和美「土地と移民——琉球政府ボリビア計画移民の端緒」歴史と民俗 34，2018，109-135 頁。
- 9) 中山寛子「第二次世界大戦後における沖縄からのボリビア移住に関する一考察——読谷村の集団移住を中心に——」沖縄文化研究 45，2018，505-557 頁。
- 10) 石川友紀「ボリビア国コロニア沖縄移民の再移住に関する実証的考察」沖縄地理 1，1986，53-64 頁。
- 11) 小林茂子「戦後沖縄における移民訓練機関としての産業開発青年隊の役割——移民青年隊の活動を中心に——」日本教育学会第 74 回大会発表要旨集，2015，324-325 頁。
- 12) 前掲 5)，95-99 頁
- 13) 伊藤淳史『日本農民政策史論——開拓・移民・教育訓練』京都大学学術出版会，2013，124-130 頁。
- 14) 前掲 13)，178-190 頁。
- 15) 安岡健一『「他者」たちの農業史——在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』京都大学学術出版会，2014，302-306 頁。
- 16) 在伯沖縄青年協会編・発行『移民青年隊着伯二十五周年記念誌』，1984，37-52 頁。
- 17) 三十五周年記念誌編集委員会編『創立三十五周年記念誌 青年隊のあゆみ』沖縄産業開発青年協会，1990，82-93 頁。
- 18) 前掲 2)，58-66 頁。前掲 5)，63-71 頁。
- 19) 前掲 17)，73-111 頁。
- 20) 瑞慶覧長仁追想集刊行委員会編・発行『榕樹は倒れても 瑞慶覧長仁追想集』，1987，236-245 頁。外間喜明・永山研次「瑞慶覧長仁と海外移住事業」（大里村移民史編集委員会編『大里村史 移民本編』大里村役場，2003），51-69 頁。
- 21) 前掲 17)，88-89 頁。
- 22) 前掲 17)，87 頁。

- 23) 前掲 17), 91-92 頁。
- 24) 前掲 17), 106-108 頁。
- 25) 琉球政府農林局移住課編・発行『南米移住への道』, 1966, 29 頁。
- 26) 沖縄県知事公室国際交流課編・発行『国際交流関連業務概要』, 1995, 135 頁。
- 27) 前掲 16), 282 頁。
- 28) 南米産業開発青年隊 40 年史刊行委員会編・発行『青年隊 南米産業開発青年隊 40 年史』, 1997, 209-226 頁。
- 29) 在亜沖縄県人連合会移民史編纂委員会編『アルゼンチン, 沖縄移民 100 年の歩み』在亜沖縄県人連合会, 2016, 133-134 頁。
- 30) 前掲 16), 269-282 頁。沖縄産業開発青年協会編・発行『青年隊のあゆみ』, 1962, 45-62 頁。
- 31) 前掲 16), 296 頁。
- 32) 前掲 16), 269-282 頁。沖縄産業開発青年協会編・発行『青年隊のあゆみ 創立 25 周年記念号』, 1980, 47-153 頁。
- 33) 琉球海外協会事務局編「海外協会三十年沿革史」雄飛 10, 1955, 22 頁・26-27 頁。同資料には南部農林高校以外にも、糸満高校移民クラブや知念高校移民研究グループ、当間青年移民同志会(中城村)、恩納中学校移植民クラブの活動が紹介されている。
- 34) 沖縄県立南部農林高等学校創立四十周年記念誌編集委員会編『沖縄県立南部農林高等学校四十年の歩み「薫風」』沖縄県立南部農林高等学校創立四十周年事業期成会, 1989, 228-229 頁所収の山城興造氏の回顧録による。
- 35) 城間善吉編・発行『在伯沖縄県人五十年の歩み』, 1959, 369-690 頁。2 人ないし 1 人を受け入れた身元引受人計 211 人のうち, 34 人は人物誌に記載があった。
- 36) 島袋伸三・米盛徳市「ブラジルにおける沖縄県出身移民の職業変遷——農業を中心に——」琉球大学法文学部紀要 史学・地理学篇 25, 1982, 79-80 頁。
- 37) 前掲 16), 167-268 頁。一部に記載のない者もいたが, 隊次や身元引受人の重複などから契約期間を特定した。
- 38) 前掲 16), 227 頁所収の仲川幸雄氏の略歴による。彼の兄である仲川実留氏についても, 第二次世界大戦前にブラジルから伊平屋村へ帰郷し, 戦後にブラジル移民青年隊の家族移住で移住して, サントアンドレなどで工業手伝を経て, 弟の幸雄氏と工場を共同経営した(前掲 16), 208 頁)。
- 39) 前掲 16), 296 頁。
- 40) 島袋伸三・米盛徳市「サンパウロ大都市圏におけるフェイラと沖縄県出身のフェイランテ」琉球大学法文学部紀要 史学・地理学篇 32, 1989, 95 頁。
- 41) 前掲 16), 97-99 頁所収の山内盛光氏の回顧録による。
- 42) 照屋聡子「大統領と友人になった男」雄飛 39, 1983, 66-70 頁。この内容は第 3 次で移住した島袋金丈氏(名護町出身)の伝記に記されていた。彼はのちにボリビアへ転住し, コロニアオキナワでの土木作業から日系企業の鉱山の通訳, 首都ラパスの日本大使

館員を経て、ラパスにて旅行社を経営した。

- 43) 賀数朝祥「栄光のブラジル開発青年隊」雄飛 39, 1983, 61-65 頁。農業労働者の社会保障制度については、水上啓吾「ブラジルの年金制度」年金と経済 39-2, 2020, 190-192 頁も参照した。
- 44) 7人の内訳として、図 5 と表 3, 表 4 に登場する no.1 と no.4, no.8, no.10, D, no.13 について、出生から現在に至る経歴を聞き取った。また、A については、出生から 1950 年代までの経歴を聞き取った。
- 45) 前掲 16), 167-268 頁。
- 46) 具志頭字誌編集委員会編『ぐしちゃん字誌』八重瀬町字具志頭公民館, 2020, 551 頁。
- 47) 森 幸一「サンパウロ市における沖縄系エスニックコミュニティの成立と展開過程の経済的側面——自営業戦術の累積的連鎖を視点として——」比較民俗研究 26, 2011, 116-118 頁。
- 48) 石川友紀「南米沖縄移民一世のライフコースと世代の継承」移民研究年報 10, 2004, 4-8 頁。2 世以下については戦前移民と戦後移民とも職業が多様化し、医師や弁護士をはじめ社会的地位の高い職業への従事が増加している (同書, 8-15 頁)。

(はなき ひろなお・琉球大学教育学部准教授・歴史地理学)

The Migration Process of Seinintai of Brasil from Okinawa after World War II

HANAKI Hironao

Faculty of Education, University of the Ryukyus

(Historical Geography)

This Article study investigated the characteristics of postwar immigrants in Okinawa, focusing on the Seinintai of Brasil who moved in the 1950s and 1960s.

Owing to repatriation and a rapid increase in population after World War II, the Seinintai of Brasil emerged as a part of the process of rearing of rural youth. In addition, this migration system was a form of the public recruitment migration system. Thus, this enabled the emigration of those without the blood relation to the first immigrants. Those rural youth

aimed to become farmers after completing the agricultural training with a 4-year contract.

Although there were numerous graduates of the agricultural high school and member of the Okinawan Industrial Development Youth Association, not many individuals corresponded to it. Many of the guarantors were prewar immigrants and large farmers in inland areas. Moreover, the guarantors included small farmers in the suburbs of cities, and some of them had their families or relatives. Members were engaged in agricultural training under their guarantors, however, the contract period was as short as 1-2 years, and in some cases, they were engaged in commercial or industrial training. After completing the training, they did not become farmers, but moved from inland areas to cities, engaged in commerce, and also carried out dekasegi to Japan starting from 1980's. These cases demonstrated that although the Seinentai of Brasil was the public recruitment migration for the purpose of agricultural development, it was not different from the general migration process to Brasil or South America by the request of close relatives actually.

The following factors contributed to such a development: Insufficient acceptance preparation with the background of the feud with the prewar immigrants, the difficulty of establishing the independence to farmers, and the generation of hyperinflation. There was the institutional problem of Seinentai of Brasil which could not sufficiently support the independence of farmers. In addition, some of them did not aim to perform the task of agricultural development from the beginning. Therefore, only a few people became farmers, although many of them had no blood relations.

Key words : Postwar immigrants, public recruitment migration, Okinawan Industrial Development Youth Association, Seinentai of Brasil, Yaese Town